法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<随想>廣末さんの不思議な魅力

外間，守善

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
42
(開始ページ / Start Page)
179
(終了ページ / End Page)
179
(発行年 / Year)
1990-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019610

廣末さんの不思議な魅力

外間守善

『四谷怪談』の伊右衛門とお岩を宙吊りにしたままにしてみたり、社会のあり方の拡散や無秩序の状態、あるいは意図的に意味を与えた「悪場所」にこだわってみたりするのは、廣末保さんのものの考え方、書き方の常套的なワザであり、いわゆる方法論である。フィールドワークで収集する諸事実に秩序と体系を与えて学問的な安らぎを得てきた私が、そのような廣末さんの方法に初めて接した時には、実に斬新な創意として映ったし、眩しいほどに輝いてみえたものである。

宙吊りの論理など、不安定である自らの精神状態を周囲の人々にも分かち与え、ものみな不安定であるという安定状況を作るトリックなんだ、と廣末さんをちゃかしたりもしてみたのだが、どうもそんなことでは納まりそうもない。私は、電車内の中吊りポスターをみていると、廣末さんのいう宙吊りを思い出して不安感に苛なまれることがある。それも廣末さんの呪縛なのであろう。厄介なことである。しかし、にもかかわらず、私にとって廣末保という人物の存在は、慕わしく懐しいものである。房々とした白髪を掻き撫でながら、多々ますます弁じ出そうとする時の野性的な迫力、それでいてあのふくよかな童顔と優しい眼、時に穏やかで時に激しい語り口に秘めた深い知性、そのどれもこれもが廣末さんの魅力である。人によってはそういう廣末さんの魅力を魔性の輝やきなんだともいう。もちろんそういう場合の魔性は、悪魔の性というようなものではなく、善くも悪くも人をまどわす性質とでもいったような意味に使われている。ところが、それがまた、不協和音のハーモニーのように、和して人々を魅了していくのだから不思議な魅力である。私など廣末さんの豊かな知性と人柄に呪縛されてもう二十数年にもなる。でも廣末さんと語りあうたびに自分まで豊かな気分になるし、知的な生産性が身についたように錯覚するのだから、やはり不思議な魅力である。

呪縛という言葉の内容にはいろいろあるだろうが、私は廣末さんの呪縛の中に快よく浸っていたい。今までがそうであったし、これからもそうありたいと思い続けている。